
香水

麻結美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

香水

【Nコード】

N2662V

【作者名】

麻結美

【あらすじ】

恋する女は些細なことでも悩みます。
でもそれは大好きな彼のためだからなの。

お気に入りの香水を使いきってしまった。

彼とのデートの度につけていたから、とうとう無くなってしまった。

また買えばいいと思うのだが、その香水は廃盤になってしまい、もうどこにもないのだ。

「あゝ……」

残念、という気持ちでしょんぼりしてしまう私。

大好きな彼が似合うと言ってくれた香り。

今度はどんな香水にしようか悩んでしまう。

今度買う香水も、彼がまた似合うと言ってくれるものがいい。

またあの優しい笑顔でそう言ってくれたら、それだけで私は舞い上がってしまうだろう。

今度も柑橘系の爽やかな香水がいい。

甘ったるい香りは彼が苦手だから。

とはいえ、なかなか気に入る香水が見つからないのが最近の私の悩み。

「はあ……」

「どうした？でっかいため息なんかついて」

「な、なんでもないよ」

しまった。

今日は彼とデート中。

久々の彼とのデートなのに、なかなか気に入った香水が見つからない為に、いつの間にか考え込んでいたらしい。

彼に心配そうに顔を覗きこまれて現実に戻る。

「ごめんね？ちょっと考え事してた」

「もしかして歩き疲れたか？やっぱり車で移動できるほうが良かったかな」

「うっん、そんなことないよ！私、楽しいもの」

いけない、いけない！

大好きな彼とのせつかくのデートなのに憂鬱な顔してたら彼が心配してしまうじゃないの！

「じゃあそんなに考え込んでいるのは何が原因なんだ？お前が上の空になってる時はだいたい何か悩んでるときだろう」

「うっ」

よくお分かりで……

「何年お前と付き合ってると思ってんだ」

確かに。

「で、俺とのデート中に何をお考えで？お姫様」

ずっとまた顔を間近に寄せられ覗きこまれた私は、降参して彼に香水の件を話した。

……

結果……

「はぁ？そんなことで上の空だったのかよ」

彼に思いっきり呆れられました。

「私にとっては『そんなこと』じゃないもん」

私は頬を膨らませて彼から顔を背ける。

だってまた彼に『似合う』って言ってほしくて必死に探したんだもの。

だけど納得できるものがなくて悩んだんだもの。

だからそんな一言で片付けないで。

「じゅめんじゅめん。そんなに拗ねるなよ」

私の頬を突きながら彼はそう謝ってくる。

「……顔が笑ってる」

「いやあ〜本当可愛いなあ、お前って」

彼は満面の笑みでそう言うと言いつつ繋いでいた私の手を更に強く握り、今歩いてきた道を戻ろうとする。

「ど、どうしたの？」

「今日の予定はキャンセル」

「えっ!?!」

「俺のお姫様の悩み事を解消しましょう」

彼はそう言って私を駅前にあるデパートの香水売り場へ連れて行った。

「ふう〜ん……香水って行っても結構色々な数あるのな。
お前が悩むのも分かる気がするよ」

彼はたくさんあるサンプルを手に取り、一つ一つ香りを嗅いでいく。

「お、これいいな」

しばらく色々な香水を見て嗅いでいたが、なかなか彼も私も気に入る香水が見つからなかったが……

「ソリッド・パフューム。グレープフルーツの香りがして、俺すっげえ好き」

これに決定、と言って彼はレジまで行ってしまった。

「あつ、私払うよ」

「いいの〜これは俺が買うの」

そう言つと彼はさつさと会計を済ませてしまった。

—
…

「ち、耳貸せ」

「う、うん」

あれから私たちはデパート内にあるカフェに入り、さっそく彼が買ってくれた香水の封を開けた。

彼は楽しげに自分が買ったソリッド・パフュームを手に取り、私の耳朶につけてくれた。

その途端、ふわっとグレープフルーツの爽やかな香りが私を包む。

「うん。やっぱりこれにして正解だったな。
俺、お前の香水選ぶの癖になりそう」

彼は笑って私にそう言った。

「……………ありがとう、香水選んでくれて。すごく嬉しい」

「俺とデートの時はそれ、つけてな？
けど、他の男の前でつけるの禁止」

「え？」

「お前のその香りを間近で嗅いでいいのは俺だけの特権」

「ななななん」

真っ赤になる私の耳元に彼は唇を寄せて次にこう囁いた。

「他の男がお前の香りに引き寄せられても困るからな」

ぼんつと音が出るくらい顔が真っ赤になっているだろう私。

大好きな彼にこんな嬉しいことを言われるなんて……

「……貴方の前でしかつけません」

「うん、約束」

彼と私の間にできた一つの甘い約束と香り。

そのことに私と彼は互いに幸せを感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2662v/>

香水

2011年10月9日13時29分発行